



社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会



ホーム
ページ
QRコード



ツイッター
QRコード

2023/4/1 No.92

発行者：社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会
本 部：〒293-0023 千葉県富津市川名1436番地

愛と奉仕の群れを目指して



理事長 木下 宣世

教会の暦では今年四月二日から主イエス・キ

リストの十字架をおぼえる受難週が始まり九日の日曜日は復活日を迎えます。

このような時に新年度の歩みがスタートしました。この年度も皆様方の上に十字架と復活の主イエス・キリストの恵みと導きが豊かに与えられるようお願い申し上げます。

昨年、望みの門は創立六十周年を迎え、五月二十一日には記念式典を行うことができました。記念誌も発行されました。多くの方々から祝福と励ましの御挨拶を頂き心より感謝致します。

このような記念事業をなし終えて、望みの門は新しい歩みへと踏み出すこととなりました。た。それではその新しい歩みとは何でしょうか。記念式典においてミランマーから来目した五名の実習生が紹介されました。彼女たちは二手に分かれ、「紫苑荘」と「富士見の里」で働き始めました。皆熱心です。早く仕事に慣れようと積極的に利用者の方々のお世話に取り組んでいます。彼女たちの存在は施設に新風を吹きこんでいます。アジアの国からこのよ

うな働き人を迎えたことは法人にとって初めてのことで記憶されるべきことと思います。

また、昨年は数多くの内部研修会が開かれました。施設長クラスから非常勤職員に至るまで経験年数等に応じてグループを分け、六月から十一月まで計十二回の研修会が行われたのです。約三百名の職員の大多数が出席したことと思います。

私もこの全ての回でお話をさせて頂きましたのでいささか疲れをおぼえましたが、これは良かったと思います。異なる施設で働く職員間の交流、法人の理念の理解、各自の立場における役割の確認等々それぞれ収穫があったのではないかと思います。

六十周年記念事業を進めるに際して立てられた「地域と共に歩むー愛と奉仕の灯を掲げて」という主題は同時に今後の当法人の歩みの指針でもあります。

この指針の実現に向けての歩みが望みの門の新しい歩みと言ってもよいと思います。しかし、この指針を実現することはそう簡単ではありません。特に「愛と奉仕」に徹することの困難さを痛感します。

主イエスはご自分のことを「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるためにきたのである」と言われました。そのために十字架におかかりになられたのです。

これが「愛と奉仕」の究極の姿です。私たちに至るまで真似のできない在り方ですがこの主イエスの「愛と奉仕」によって私たちは生かされ、救いを与えられています。

だとしたら私たちも及ばずながら主イエスから頂いた「愛と奉仕」のほんの一部分でも他者にお分かちしなければならぬと思います。

職員一人ひとりがそのような思いをもって働き、法人全体がそのような群れとなる、この願いの実現を目指して新年度のみを始めたと思います。

二〇二三年度の始まりにあたり



常務理事・法人事務局長
西尾 建

年度の始まりに当たり四月号の「望みの門」には機関誌編集委員から全施設・事業所に原稿の依頼がされる。何かトピックがあったときには法人事務局も寄稿をするのだが、久しく事務局の職員の文章は「望みの門」に掲載されていない。この原稿を書く三月は事業計画の締め切り、予算、理事会、新年度の人事など一年の中でも忙しい時期の一つである。当然、施設の職員も年度替わりで忙しい時期であるので言い訳にはできない。今回は、久し

ぶりに寄稿しなければと怠惰な自分に喝を入れた次第である。

昨年度は、「法人創立六十周年」が法人の一大行事であった。周年行事は創立時の理念やこれまでの苦勞に思いを馳せ、これからの決意と共に身が引き締まる時となる。きっと多くの職員がそうであったと思う。

新型コロナウイルスにも苦しめられた。流行からしばらくは守られてきた望みの門も昨年にはクラスターを発生させてしまった。罹患された利用者・ご家族、ご心配をおかけした皆様には大変申し訳ない思いである。職員は感染者が大勢いる中奮闘してくださり、感謝であった。

二〇二三年度の法人の重点計画は①財政基盤の強化②人材育成③中・長期計画の策定である。①の財政の問題は、本年度より昨年竣工を迎えた望みの門本館の借入金返済が本格的に始まること大きな要因である。加えて物価高騰、光熱費の高騰に非常に大きな影響を受けることが予測される。継続的な福祉サービスの提供と職員の雇用や新たな福祉ニーズへの対応を考えると安定的な財務体質を確立することは喫緊の課題だ。

そのことに関連して③の中・長期計画は、財政を含めた老朽化した建物（望みの門の建物はS五十年代建築のものが多く、それらが築四十年を経過してきている）の建て替え計画や法人の方向性を計画していくものである。

る。社会の変動に伴い社会福祉を取り巻く環境も今後、大きく変わることが予測される。変化に対応すべく社会福祉連携推進法人なるものも制度として登場した。理念とビジョンをもって経営に当たらないと取り残される時代である。

②の人材育成については、数年来重点計画として掲げられてきた。福祉は職員の質、量で提供する支援に差が生じる。新しい職員が得難い状況が続く中、今いる職員には生き生きと働いていただきたい。今年度から新たな制度をスタートさせる。職員の成長（育成）に焦点を当てたもので、施設長との年間三回の面談を通じてその実現を目指す。呼称は「育成面談制度」とした。法人や施設から職員のステージに応じて求められる職員像を提示し、それらで自分に足りないことや更に伸ばしたいことを確認し、自らが目指す職員像や働き方を認識してもらうことで仕事を通じた自己実現を図ってもらいたい。これらを各自の目標として掲げ、それに向けて自己の成長を意識して業務に取り組んでもらうことが狙いだ。「活気溢れた職場は働き続けたい職場となり、外から見るとここで働きたいという職場になる」と理想論を言い続けているが是非叶えたい。

年度初めの誌面だったのであららと今年度の計画を書いてみたが、相応しかったかは

編集委員の判断に委ねたい。

今年度も皆様方には望みの門へのご指導、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

恩寵六〇年

主共にいまして 6



ユーラシア大陸ひとり旅 (3)



相談役 井本 義孝

ハンブルクを発って
既に十六日、床屋にい

きさっぱりする。床屋には万国共通の人をなごませる良さがある。アテネからイスタンブールに行く。ギリシャからトルコだ。アテネ発のトルコ空港に乗る。アテネよ！ギリシャよ！さようなら！イスタンブールホテルの室は坂に面していたので車がうるさかったが、即製の耳栓で熟睡し元氣恢復。午前中市内見物する。ぶらぶらとモスクとサルタンの居城であった博物館を目指し歩く。思いかけず市場とおぼしき所にでる。大きな籠に野菜を山と積み背をふたつにして必死の形相で運ぶ男。トマトの入った箱を三段も四段も積み、体を海老のように九十度まげ行交う自動車の間を急ぐ男。スイカを山盛りに大八車に積み、汗まみれでいく人。山のようにサンダルを積

んで行く少年。まさにここはアジアだ、東洋の匂いがある。

歩くうちに十時半の朝食兼昼食となる。魚のフライ、ポテト、トマトですます。

さらに歩くと裏町とおぼしき通りに金物屋、屋台、コーヒー店などがある。

トルコの人達の世話好き、親切さはどうだ。日本は大好きとか、よく来たとか愛想のいいこと。もうどう言ってもここはアジアである。

途中親切なイスタンブール大学医学部三年生というハッサンと名乗る学生から郵便局やバザールを案内、イラン方面の鉄道便のことまで親切に教えてくれ感謝の言葉もなかった。お蔭でどれほど助かったことか。

午後二時ハイデルパシヤ中央駅（イスタンブール）着。いよいよ中近東横断鉄道の旅である。イスタンブールからイラン国境のメシエドまで千四百キロくらい。ここで列車とお別れとなる。

途中テヘラン駅ではハイデルベルク大学卒業の医師夫妻と出合い是非ここより約七百公里のペルシェポリス（古代ペルシャ帝国）の史跡をすすめられその気になってテヘランから夜行バスで約七百公里一日半かかり殆ど砂漠の中をダブリースに着く。ダリウス大王の遺跡を見物し、再びテヘランに戻る。

テヘランからアフガニスタンまではバスと馬車であった。ヘラート、カンダーバルから

アフガンの首都カブールまではバスであり、BC三五〇年頃アレキサンダー大王のインド遠征のルートである。

首都カブールで人參ジュースを飲んだのがわるかった。ひどい下痢となり必死で祈った。ここで倒れれば百年目、誰も助けてはくれないし運のつきである。幸い断食祈禱の結果一日半で全快。早速隣国インドのデリーを目指し、バス停に行き乗り合いバスに決める。屋根にも人が乗っている。バスは馬糞の匂いと誇りの中をのろりと進む。進むにつれ、峻しく深い谷を観ながらデリーの方角を目指しつつ走る。山頂近くが国境であり、全員下車しアフガンとインドの兵隊の前を通り、関税所に行く。そこで椿事出来型通りパスポートを出す。係官曰く、「お前はノービザである。」戻れとの合図。一瞬茫然とした。戻れと言わなくても、すでに国境を超えた地点で「道路許可証」提出させられている。だが文句を言ってもどうにもならぬ。すぐごと国境線を超えた。そのとたん、わあっと雲助のようなタクシートの運転手に取り囲まれ背広を引っ張られるやら、カバンを持っていかれそうになるやら、必死で振り払って乗ったのが旧式のダットサンであった。すでに夕陽は地平線に近く夕暮れは迫っていた。タクシィに乗り今朝出たラホールのレストランに降り今ホテルと告げた。眞暗の中を約一時間運転手を

入り口で待たせ、ホテルのフロントに今来た所を話し適正料金を聞き運転手に支払う。

さて困ったインドのビザはドイツで出発する時不要と大使館で言われたが、それは空路の場合であったとは後の祭りであった。さて今からアフガンのカブールにある大使館に戻るのはいざりや一人になり祈った。結果カラチに飛べばビザは不要で入国できるとわかり早速カラチに行くエチオピア航空で飛んだ。カラチの空港ではのんびりとして空港事務官の髭を生やしたカイザル氏が親切にホテルも教えてくれた。

こうしてカラチに泊まることになり、偶然ホテルの近くに日本航空の営業所がありそこで文句なしに東京行の予約をした。この日は中々寝付かれなかった。出発は明朝六時であった。

明朝四時には起床するようにし、空港に早朝車を走らせた。機は予定通り出発したが途中嵐となり香港に寄り一泊する事となった。コストは全て空港会社持ちで思わぬ経験となった。翌日午後空港に行き福岡行きの便があり福岡空港に着いたのは十月十七日二十一時頃であった。空港には知子の母上や義則(三歳)妹達が出迎えてくれた。かくしてユーラシア大陸一人旅は大団円を迎えたのである。

了

実践発表大会報告

実践発表大会実行委員 玉手 咲希

二月二十二日に第九回目となる実践発表大会を行いました。実践発表大会は①日常の実践の成果を法人間・関係機関等に発表し共有する②法人理念の実現に向け、ケアの質を高め、利用者・家族の安心・安全を確保する③のぞみ会の価値(ブランド力)を地域に浸透させることを目的とし、二〇一三年から法人内研修の一環として行ってきた行事です。新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、こ

こ二、三年は録画の配信や発表者のみの集合で行っているところですが、今年も拡大防止対策として規模を縮小して行いました。会場での聴講は取りやめとした代わりに、Zoomにて各施設へ大会の様子を配信しました。

発表施設は八か所あり、「サービスの質に関する発表」と「働き方・コロナ対策に関する発表」の二グループに分類しました。1群の座長には当法人副理事長の木下勝世先生、2群の座長には特定非営利活動法



令和4年度 第9回実践発表大会 発表一覧・表彰結果

結果	発表群	発表施設	発表名	課題・事項
	1	1	養老ふくしネット生活自立支援センターまいつ	地域資源と協働した認知症事業の取り組み～公費ランチャーズ～
特別賞	1	2	望みの門学園	利用者にも職員にも優しい施設を目指して～ありがとうレター～の取り組み～
優秀賞	1	3	望みの門ビーター・バインの家	認知症予防施設の強み～法人内連携ケースの紹介～
	1	4	望みの門共生舎	相互の命の安全を公開～利用者の居れど引き出す支援・利用者支援の、地域の力に～
特別賞	2	5	望みの門デイサービスセンター	多様な働き方について～誰もが働きやすいデイサービスを目指して～
	2	6	望みの門園上見の家	ミャンマーからの養育生を迎えて
	2	7	望みの門園見日	施設内クラスター発生時における利用者の様子～介護員として行った対応と検証～
優秀賞	2	8	望みの門園見サードス室	いざというときのために～向きあふ前に食べよう～

人東京YWCAヒューマンサービスサポートセンターの田島誠一先生を昨年に引き続きお迎えし、大会の進行をお願いしました。

第1群の「サービスの質に関する発表」では、地域資源を活かしたり、他事業所との協働で成果が得られたケースや、利用者の特性を理解して力を引き出す支援、自己肯定感を高めるための取り組みなどが見られました。

第2群の「働き方・コロナ対策に関する発表」では、働きやすい職場づくりのための業務内容の見直しや、外国人実習生への介護指導を通してより良いサービスの提供を目指す取り組み、コロナ禍での感染対策や感染等の

非常事態に備えた実践などが見られました。

座長を含む四名の審査員が、発表の姿勢や取り組み内容を審査し、優秀な発表には最優秀賞・優秀賞・特別賞が贈られました。今回は望みの門・ピーターパンの家の「総合福祉施設の強み」法人内連携ケースの紹介」が最優秀賞となりました。木下記念学園クリニック、望みの門・ホテル、地域包括支援センター、里親支援センターと専門分野を生かした連携を行い、それぞれのケースで子どもの養育環境が改善されたという事例でした。スライドも見やすく工夫を凝らして作られており、ピーターパンの家の活動が良くわかる素敵なお発表でした。

どの施設もパワーポイントを使用し、写真やイラスト・図などを活用された実践発表でした。日常業務で多忙な中、パソコンで資料を作成したり、時間内に収まるよう練習したりと準備に時間を割かれたことと思います。発表者はもちろんですが、参加職員を送り出してくれた施設や、忙しい中聴講くださった職員の協力があったからこそ、無事に実践発表大会が行えたのだと思います。この大会を通して、他施設の取り組みを参考にしたり、職員がお互いに刺激し合うことで、のぞみ会が魅力のある施設・職場となれるよう、次回以降も実行委員会の務めを継続していきたいです。

東京望みの門 自立援助ホーム マナの家

一年を振り返って



指導員 村田 紋子

昨年二月より月二回の宿直をさせて頂いております。目黒施設長にあるご相談をするためにお訪ねしたのでしたが、「宿直員を探している」と伺い、三人の友人、知人に打診したものの全て断られてしまいました。私は元児童養護施設職員で、私の施設の子どもの達何人かマナの家で大変手厚くサポートをして頂いたという繋がりがありましたので、少しでもお役に立てるならばとの気持ちで始めさせて頂きました。

今までの入所された方々の記録も拝見しています。私は長らく子ども虐待に関わってききましたが、殆どの方が非常に過酷な生活を経て入所されていることに、改めて驚かされました。自立援助ホームは、児童養護施設等他の施設に比べ、場所を秘匿しなければならぬ等の事情から社会的認知度は高いとは言えないかもしれませんが。しかし制度の狭間に陥っている子どもたちにとって、不可欠な場所であることを再認識しました。同時に周囲の大人がいかに子どもたちの真意を聞き取ることが難しいか、虐待に気づけないのかにつ

いても、記録を読みながら、つくづく考えさせられました。

私は六年前から、生活保護法や生活困窮者自立支援法による相談業務に携わっています。マナの家で生活されていた方と、生活保護の現場で実は出会っていたことが後から判ったりと、子ども虐待やDV、女性の生活困窮等それぞれが深く関連していること、社会資源相互の連携の重要性についても痛感しているところです。

マナの家でもう一つ、教えて頂いているのは「環境」の大切さです。「辛い体験からの恢復」のために基盤となるのは安心できる「居場所」であるとされています。マナの家には、文字通り「家」の雰囲気があります。マナの家でできることも確かに限界はありますが、子どもたちがこの場所で少しでも力を取り戻



して、次の所へ歩んで行って下さるようにと願っています。

婦人保護施設 望みの門学園

新しい歌を主に向かって歌え

園長 田尻 隆

米大リーグで「最高のライバル関係」といわれるヤンキースとレッドソックス。

レッドソックスの本拠地球場フェンウェイ・パークの男子トイレの便器に、ヤンキースの“NY”ロゴを描いてみたところ……。それまではいくらトイレをきれいに使うようにお願いしても便器からそれた小便で床が汚れたり、それを掃除するための人件費がかさむ等多くの問題がありました。ところが“NY”の絵を描いてからは無意識に絵を狙うようになり、床の汚れも減り清掃費用も大幅に抑えられました。これを「ナッジ理論」と呼ぶそうです。人間の持つ「強制されるよりもそれとなくして欲しいことを伝える方が動きやすいという性質」に基づいています。当り前のことですが他者の行動を変えることは難しいものです。そこで「強制」するのではなく「そっと背中を押すこと」で相手の行動を自然体のまま望ましい方向に変えることができます。この手法は福祉の現場

においても有効なものではないかと考えます。

今年、学園の年間標語に「新しい歌を主に向かって歌え」（詩編九八編一節）という一言葉が与えられました。この「新しい」の意味を考えると、new（古いものから新しい違ったものに取り替える）と言うよりfresh（同じものであるのに、古い状態から新鮮な、真新しい状態に変えられること）がピッタリだと思います。新しい歌でもいずれ時がたてば古くなります。しかし古い歌であってもそれを歌う私たちが新たにされ、新しい心で歌うことによって新しい歌に生まれ変わるのです。残念ながら私たちは「欠けの無い、高潔」な人間ではありません。ただ神さまの恵みによって罪を許され、欠けをおおわれ、新しい生き方へと招かれていくのです。そんな私たちが心を込めて主に向かって歌うことの「ナッジ効果」として、自分の中で眠っていた新たな賜物が揺さぶられ、それが他者を思いやる言動に生まれ変わり、自らの喜びとして戻ってくる。そのような自然な共感力を学園の中で育んでいきたいと願います。

いよいよ女性福祉の増進や人権の尊重を掲げる「困難を抱える女性への支援に関する法律」の施行まで残り一年となりました。施設の名称も婦人保護施設から女性自立支援施設に代わります。私たちの中には誰しも新しい

ものに対する恐怖心、億劫さ、嫌悪感というものがあるようにです。古いもの、慣れ親しんできたものを心地よしとする態度です。それを乗り越えるべく女性支援の全ての関係者は女性の権利擁護のため新しく生まれ変わることが求められているのです。新たな女性福祉の構築を目指し望みの門学園にとりましても新しい歌を主に向かって大いに歌う一年としたいものです。



富津教会キャンドルサービス

養護老人ホーム 望みの門 楽生園

早かつた歳日



支援員 鈴木 優子

私がのぞみ会に入職し、九年目になりました。いつの間にか新人職員から中堅職員になってしまいました。この間、家族も増え今は小学生になっています。自分でもこんなに長く働けるとは全く思っていませんでした。子育てを行いながら仕事をしていると、突然のことが多々起こります。特に子供が小さい時には熱が出た、怪我をした等、迷惑をたくさんかけてきました。それでも今までやってこられたのは、先輩職員や同僚のおかげだと感謝しています。特別養護老人ホーム、デイサービスセンターでお世話になり現在は、養護老人ホームで支援員として働き、介護ではなく支援としての難しさを感じながら日々奮闘しています。

支援員とは何か？自分は利用者さんに何をしてあげられるのか？少しでも話を聞いてあげられているのだろうか？困っていることはないのだろうか？私は出来ているのだろうか？と思うばかりです。楽生園は出来ることは自分で行っていただく施設です。できないことを支援しているのですが、それ以上に施

設の掃除、洗物、ゴミ出しまでお手伝いして下さる利用者さんもあります。施設の利用者さんが楽生園で良かった、楽生園が一番良いと思ってもらえるように私も職員皆で頑張っていきたいと思っています。



楽生園に来て驚いたことは、毎朝、楽生園の利用者さん、職員での全体朝会に木下理事長が来て下さり讃美歌、聖書のお話、お祈りをしていたのだいた後、ラジオ体操まで一緒にして下さるのです。他の施設では無かったのが当初はびっくりしました。私には、望みの門でお世話になり尊敬できる先輩達に出会えることができました。厳しいけれど自分にも厳しい。私もその方々に少しでも近づけるようにこれからも努力をしていきたいと思っています。一日も早く新型コロナウイルスが終息し、以前のような日常に戻り制限自粛なく外出等できる日を願っています。

特別養護老人ホーム 望みの門 紫苑荘

コロナ禍での行事とそれからの行事

生活相談員 山崎 洋子

二〇二〇年十一月から介護職員から生活相談員となり、二年が過ぎました。当初は全く違う仕事内容で戸惑いましたが、最近になってようやく仕事に慣れてきたという思いです。相談員になってからまもなくコロナという感染症が流行り始め、利用者の方に介護職員と協力し楽しい時間を過ごして頂きたいと考えていたが、思うように実現できずにいました。

利用者様から「コロナとはわかってはいるが、外の空気が吸いたい。外に食べに行きたい」との声が聞かれ期待に応えられない虚しさもありました。外出は出



来ませんでしたので利用者様の楽しみの提供として短時間ではありますが、毎日のレクリエーションや月一回、午後には節分やひな祭りなどの行事規模のレクリエーションを行う行事レクを行っています。また、昨年の暖かい時期には紫苑荘の敷地内ですが、外でテイクアウトの食事を食べたり、ホットプレートで焼きそばを作り焼きたての物を食べて頂き大変好評でした。

今後はコロナと共存していかなければならないと思いますが、定期的に暖かくなり世の中はコロナ対策緩和に向かっていきます。利用者様ご希望の外出一回目を予定していますが、企画している私たちは高齢者施設の為少々不安な面もあります。利用者様の皆様が楽しく施設生活をして頂くため様子を見ながら外出行事の回数を増やしていきたいと思っています。

また、数名の利用者の方々から「夕飯終わったら、飲みながらカラオケしたい」との意見がありましたので「夕涼み会」も計画していく予定です。

これからも介護職員達と協力しながら利用者様が生きがいを持って楽しく過ごして頂けるようにしていきます。



特別養護老人ホーム 望みの門富士見の里

言葉



介護員 笹生 歩

春の気配も整い、日差しが心地よい季節となりました。皆様におかれましてはお元気でお過ごしのことと思います。

世の中が異様な緊張感をもち、早くも三年が過ぎようとしています。今でさえ、感染症に怯える日が続いておりますが、その中でも私が大事にしていることがあります。

『言葉』です。言葉には言葉があり、発した言葉通りの結果が表れる力があると考えられています。効果として期待できることは、『願い事が叶う』です。自分を肯定する前向きな言葉は、持っている能力と行動力を高めてくれます。繰り返し使うことによってできると言う自信をより強く持つ事が出来るので、希望通りの未来を引き寄せやすくなるのです。

仕事をしている中でも、家にいる時でも、言葉として前向きな考えのものをばかり口にしていきます。あまりにも楽天的のものを考えている様子に見られ「お気楽でいいね」と言われる事もあります。これは絶対に譲れません。後ろ向きな発言をしている人は、表情も

暗く、モチベーションが下がったり、悪い結果を引き寄せやすくなったりします。

職員や入居者様との会話でも『言葉』を使っ、笑顔が見られた時、言いようがない幸福感に包まれます。

こんな世の中だからこそ、一度振り返り自分自身で何かを考える時、口に出すときは、前向きな言葉を発して下さい。言葉の魔法できっと素敵な未来が待っています。

老人デイサービス事業 望みの門デイサービスセンター 今と未来

介護職員 安藤 佳子

あたたかい南風が吹き、海はキラキラと輝いて、山や町は桃色や黄色の花が咲きみだれています。わたしたちの富津に春が訪れました。望みの門デイサービスセンターでは、皆さまのお陰で新規利用者が増加傾向です。ご利用者が一日三十人以上の日もあり、入浴は現在午前と午後に分けて支援している状況です。嬉しさと忙しさのめまぐるしい日々です。富津市高齢者福祉計画によると富津市では二〇二〇年以降から二〇四〇年にかけて八十五歳以上の人口が約一・五倍に増える見込みとのことです。介護区分認定者や認知症高齢者が今後急増する中、現役世代の人口は

減少していくことでした。デイサービスセンターの対象者は、在宅生活を主としている方です。当センターのご利用者の中で十年以上ご利用していただいている方もいます。しかし、その逆もあります。約一か月の利用で終了してしまう利用者もいます。その理由はさまざまであり、自宅で転倒してしまい入院、そして入所となってしまうケースや、認知症がすみ在宅生活継続が難しくなったケースなどがあります。突然のサービス終了により、ご本人様ともう会うことはできないのだと悲しむ暇もなく、新しい出会いがやってきます。

当センターの朝礼では必ず施設長より朝の一言があります。今年に入り、職員へ必ず呼びかける言葉があります。「今日もバタバタと忙しくなると思いますが、時間がかかっても焦らず、一人ひとり、一つひとつを丁



寧に対応していきましょう」私はこの言葉が介護の基本だと思っています。介護の未来を見据えながら、今、目の前にいるご利用者が「今日もここにきてよかった」と感じてもらえる介護支援を今日もつづけていきたいと思っています。

就労継続支援事業 望みの門新生舎 一年間、本当に良く頑張った

施設長 森 和浩

三月八日、「さあ、みんな出発だよ！」

今日はボーンナスを貰ってみんなでイチゴ狩り。コロナが発生して三年。食事も行事も全て分散型で実施してきましたが、久しぶりの全員で行く行事です。でも、密を避けては基本とし、マイクロバスやワゴン車を連ねて計五台に分乗して行くこととしました。当日は全員にボーンナスを支給し、自分の働いたお金で楽しむ行事です。朝の会で一人ひとりに手渡し中身を確認します。「おぉーっ！」と驚く人もいれば「なんかお札がいっぱい入ってる?」と不思議がる人も。一所懸命頑張ったご褒美だよねとても嬉しそうな顔が伺えます。食事代と入園料を計算し、残ったお金がお小遣い。「帰りはお土産がいっぱい買えるね!」と胸が膨らみます。イチゴ狩りではハウス一棟が貸し切り。真っ赤でとても美味



しそうなイチゴがたわわに実ってなんとも美しい。早速食器トレイを持って入場です。「甘い!」「うまい!」「このイチゴおいしいよー!」と利用者さんの声ハウスに響きます。コロナだから黙食とは言えず、今日は思う存分楽しんで欲しいと感じます。とにかく大きいイチゴを求める人や、どっしり落ち着いて端から攻める人、目移りして隣の列までどんどん進む人と食べ方も様々。たまに

「あつ、それ赤くないよー」という声も聞かれましたが、まあ美味しく食べられれば良いでしょう。目移りしながら美味しいイチゴを求めてハウス内をウロウロすること三十分。時間はあつという間に過ぎて、もうイチゴでお腹いっぱい。「じゃあお昼はいらないね?」「それは別ー!」利用者さん職員も一緒にあって楽しい時間を過ごしていました。農園の園長さんに全員でお礼を言って、次に向かうのは道の駅。みんなが楽しみにしていた買い物の時間です。「グループホームへのお土産はね」「お母さんにはこれかな?」と悩む人。お父さんにはないの?「えっ!」ちょっと面白かった会話でした。それぞれが自分の働いたお金で自分へのご褒美と家族やお世話になった人に胸を張って買っている姿は「働いた自信」の様に映ってなりません。「あーら、こんなにー!ありがとう!毎日頑張ったもんね!」という自分への評価を期待しているようにも感じます。食事は君津市内の割烹料亭。いつもと違ってちょっと格式がありみんな緊張していました、イチゴでお腹いっぱいになったはずが並べられた料理に再び「美味しそー!」

食べて、買って、また食べての一日でしたが、久しぶりの和気藹々とした外出は一年間の苦労を忘れさせるほど楽しいものでした。

一年間の出勤日数は二六四日でしたが、これまでほとんど休まず出勤できた人、毎月の皆勤賞が十一月連続となっている人も多くいます。それぞれが自分の持っている力を最大限に発揮して、胸を張って「自分は社会で働いている!」という実感を持たせることができた行事だったと感じます。みんな本当に良く頑張った一年でした!

共同生活援助事業 グレースホーム

私たちが考える『お家』

施設長 白鳥 尋子

障がい者のグループホームとは?と調べると、『日常生活、社会生活を総合的に支援する法律(障害者総合支援法)に位置付けられた』と難しく、関りを持った事のある方ではないとわからない言葉も出てきます。

一言でいうと、障がいのある方が地域で普通の暮らしをする『お家』です。では「普通の暮らし」って何だろう?各家庭により生活は異なり、毎日が楽しく笑っているばかりではないはずです。

グレースホームは二〇名の利用者様が四ホームに分かれて生活しております。見学の方にはよく特徴を聞かれますが、生活するには建物は古く、駅からは遠い。交通の便も悪

い。ただ唯一言えるのは家庭的であること。

家庭的と聞くと『ぼかぼか温かい』『笑いの絶えない』等季節で例えると春のようなイメージを連想されがちですが、一年中春の家庭なんて無いのでは?皆ランダムに四季が移り変わりその都度乗り越えて生活しているのではないのでしょうか。それが「家庭的」・「普通の暮らし」であり『お家』だと私は思います。グレースホームの利用者様も春かと思えば突然嵐や冬に変わり、時には寒波が続くときも……。二〇名もいると毎日どこかで誰かの季節が急変。しかし障がいがあるが故自分で乗り越えることが難しい。そこで職員が乗



り越える方法や手段を導く手助け役となります。日頃は兄弟・姉妹・友人のような関係である職員が、トラブルの際は父となり母となり利用者様と一緒に解決方法を考えます。

一九九五年五名の生活ホームから始まったグレースホーム。開所当初五〇代だった利用者様も八〇代。全国的なグループホームの高齢化問題はグレースホームの課題でもあり年々大きくなっております。障がいがあるが故、老化に伴い精神のバランスが崩れやすくなってきた方、認知度の低下がみられる方が増えており、「普通の生活」・「家庭的な生活」とは……。第二の家庭的な『終の棲家』も検討していかなければいけません。利用者様からは「グレースホームに居たい！」というありがたいお言葉。私たち職員は更に知識や技術を向上し、ご利用者様の意思・意向に出来る限り応えていけるよう、一人ひとり丁寧な支援を心掛けこれからも利用者様の個々の生活を守っていきます。

どんな時も……?



特定指定相談支援事業所 望みの門ペテル

相談支援員 藤本 未来

『相談事業所ペテル』って何を仕事としていると思いますか？お悩み相談室を連想する

方が多いのではないのでしょうか。私の主人も「明日、〇〇まで行かないといけない」「ずっと訪問で走り回って疲れた」等と口にする。と「何で？電話で話聞いて済ませれば良いじゃん」「休みの日とか遅い時間に何で訪問するの？」と異動したばかりの時には言っておりまして。実際、このように思う人も多いのではないのでしょうか。相談事業所で働く相談支援専門員は、障がいのある人が福祉サービスを活用できるよう支援する仕事をしています。その中でも『ペテル』では障がい者・児の計画相談支援をメインとしており、福祉サービスの調整を図り、利用開始までをサポートしたり、既に提供されているサービスの見直しを図っています。障がい者福祉支援や生活、住居等に暮らしにおける悩みの相談支援・更には障がいのある人や家族の生活における悩み、不安の相談にのるといった役割もあります。

ペテルでは三六五日休日問わず、事業所の携帯電話を所持し（昨年コロナに感染した際にも関係機関に謝罪や日程調整連絡を入れ、相談者に対応していました）、相談者の都合に合わせて訪問にも行きます。この仕事を通じて相談者の方や御家族、支援する様々な事業所の方と知り合えた事はペテルに異動してきて良かった点です。

各関係機関と連携し、利用されている方々の日中活動や生活が充実したものになればと願うと共に相談支援専門員の仕事理解が得られると嬉しく思う限りです。

千葉県中核地域生活支援センター 君津ふくしネット
君津ふくしネットに配属されて思うこと

相談支援員 市川 昌浩

君津ふくしネットに配属となり四カ月が経とうとしている。これまで私は、高齢者福祉の畑で相談員、介護支援専門員などの業務に携わってきたが、ここに配属されて初めに感じたことは、基本的な援助技術は役に立っても、それ以上の多様な福祉の技術や知識、援助方法が必要となり覚えていかなければならないということである。「ゆりかごから墓場まで」と言う福祉発祥のイギリスの言葉にもあるように、このセンターには多様な悩みや障害、幅広い年齢層、そして様々な要素や人間関係が絡みつき、拗れた困難ケースが多方面の関連機関や個人から相談が入って来る。配属当初の私は障害者福祉の知識と経験に乏しく、なかなか思うように支援までの道筋以前に電話・面談が上手くいかずに苦しんだが、先輩の中核センターの相談員さんの指導もあり、少しずつではあるが自己成長して

いる実感がある。また電話が鳴るとドキッと
して、ちょっとした恐怖感もあったが、今では
電話をかけてくれる常連のクライアントさん
とのやり取りに慣れてきて冗談も言えるく
らいまでには認知されるようになった。

電話での相談支援は、センターの業務のほ
んの一部分であり、全体を知るまでには至ら
ないほど業務の奥は深いと思う。本人や家族
などの相談の受付は初めの一步であり、そこ
から先は訪問、面談や関連機関との連携など
である。そのアプローチの仕方はケースに
より異なっており、パズルを組み立てていく
ような試行錯誤と柔軟な対応に迫られてい
る。人の悩みと言うデリケートな部分を扱う
ことへの恐れもあるが、それ以前にクライエ
ントの援助と言うその方の人生の岐路に自分
たちも関わらせて頂き学ばせて頂いている感
謝と自己成長できる充実感はある。

私はまだセンターに配属されて日が浅く業
務内容もまだまだこれから磨きをかけて自己
成長をしていかななくてはならないが、ここでの
業務は奥が深く、人を知り、地域を知り、
自分も知り、福祉の何たるかを知らなければ
道に迷ってしまうほど、自分をしっかり持
ち、自信を持ち、最前線で働かせて頂いてい
る感謝の気持ちと共に、関わる皆さんが幸せ
の一步を踏み出せるように支援させて頂き

低姿勢で臨むことが大切ではないかと感じて
いる。今はまだ経験が浅いながらも、同じ職
員の皆さんや関係機関の担当者、そしてクラ
イアントの方々と共に生きていける充実感を
味わいながら、今後も切磋琢磨して業務に臨
みたいと考えている。中核地域生活支援セン
ターの業務は広くて深い、走り出したばかり
の私には先が見えない世界だが、いつか、こ
の仕事に携わって良かったと思えるような自
分でありたいと今は願っている。



事務員 松浦 順子

日本は島国で自給率も低いというのに食品
の廃棄率＝フードロスが高いそうです。原因
は何か。賞味期限をきっちり守るから？出来
立てを提供するために一定時間経過した物を
廃棄するから？色々あると思いますが企業も
減らす努力をしているはずですが。廃棄するに
も経費がかかり利益が減るからです。

自分はどうか？と考えてみました。勿体な
い、バチがあたると思いながら冷蔵庫で古く
なってしまった野菜達。冷蔵庫は腐らない箱
ではないとわかっていても一度仕舞うと忘れ
てしまい原型をとどめない物もありまし

た。これではいけない
と買い物を
して仕舞う
時に在庫の
チェックを
し、レシー
トを見て何
が作れるか
書き出して
みました。

例えばさ

つま芋は天
ぷらと焼き芋です。一斗缶があったのでアル
ミホイルで巻き焼いてみました。火力が弱く
結局ガスのグリルで仕上げましたが余す事な
く美味しく頂けました。食材も一緒にメモし
てみたら、廃棄も減り帰宅後迷わず作業に取
り掛かれ、いい事づくしでした。

すっかり気をよくした私は、災害に備え常
温で保存でき普段より少し在庫を持ち使用し
たらまた買い足すローリングストックを始め
ました。要するに多めに在庫する事です。

加工品だからと油断できません。長いよう
で賞味期間が直ぐ来ます。また被災された方
の声を聞くとおにぎりばかりで飽きた、野
菜・果物が食べたかったそうです。水やエネ



ルギー源の炭水化物ばかりに目がいきがちですが漬物や缶・瓶詰、野菜ジュース等常備します。今月で期限切れになる物を早く食べるコーナーを設け、毎月チェックします。勿論家族の好みのお菓子等もあります。

フードロス削減を意識しながら、防災備蓄品も多く種類を持ち、食を楽しみたい。包括の備蓄品も工夫したいと思っています。

居宅介護支援事業者 望みの門在宅サービスセンター 伴走する介護支援専門員になりたい

管理者 立和名 康代

高齢になるにつれ「耳が遠くなった」と訴える方が多くいます。いわゆる難聴と呼ばれる症状ですが、日本ではどれだけの人が難聴に悩んでいるのか実態把握が遅れています。

日本補聴器工業会の調査によると、日本では「難聴またはおそらく難聴だと思っている人」の割合が十一・二％に達しているとされています。さらに、その割合は年齢が上がるごとに増加する傾向にあり、七十五歳以上になると三九・二％にまで上昇します。つまり、今後二〇四〇年まで高齢者が増加するのに比例して難聴者の数は増えていく可能性あります。しかし、日本では難聴者に対する支援がまだまだ不十分だと指摘されています。

厚労省の難聴者の基準が厳しく、障がいと認定されるハードルが高いからです。

障害者総合支援法の「身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む）その他の心身の機能の障害がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものという」という条文による基準があり、「聴覚障がい」は生活に困難だと認定されづらいです。

私達介護支援専門員は毎月計画された支援が円滑に利用されているのか、利用者様を訪問させて頂きます。耳の傍で自分のマスクとご利用者様の耳が触れる状態でお話してやっているとわかる利用者様も多いです。しかしそれほど難聴でも障がい者認定は六級程度で自治体ごと異なりますが、木更津市は六級認定で補聴器は片耳のみ四万円程度の補聴器が支給されます。が「片方だけ……です」。なかなか厳しいです。

難聴は高齢者の健康に影響し日常生活動作やQOL（生活の質）にも強く影響します。又根本的な治療が難しいともいわれています。そこで、最も簡単にできる対策が補聴器の使用です。担当の利用者様で支給された補聴器が耳に合わず頭痛に悩まされ、その後自費で購入された方がおられます。補聴

器はランクがあり安い物から高いものまでさまざまで、片耳五〇万円の高級なものもあり両耳で一〇〇万円になってしまっています。簡単に購入できる金額ではありません。とはいえ、加齢による難聴がきっかけで閉じこもりになってしまいう方は多いです。又聞こえにくく相手が何を話しているのか理解出来ないからとサービスに通わなくなってしまいう方もいらっしゃると思います。日本では補聴器の利用が進んでいません。先進各国と比較してみると、イギリスでは聴覚障がい者の四七・六％が補聴器を利用しているのに対し、日本では十四・四％にとどまっています。自治体などで独自に補聴器給付はされていますが、国として対策には乗り出していないです。

認知症になる人を減らすことは介護保険制度の狙いとされています。今後は介護予防という観点からも認知症リスクを低減する政策が実施されると良いと思わずにいられます。介護支援専門員は利用者の希望に耳を傾け、伴走する立場です。利用者様は生きづらさを抱えていることが多く、喜びの前にしんどさもあります。制度のつなぎ目をスムーズに移行し、いつまでも住み慣れたご自宅で安全に暮らすお手伝いをさせて頂きたいと日々頑張っています。

推し！活



居宅老人介護 望みの門ホームヘルプサービス

管理者 久保田 地香

寒さが和らぎ、日に日にあたたかくなり春を感じる今日この頃、猛威を振るったコロナからも少しずつ解放され、今年の春はマスクを外して春の風を胸いっぱいを感じる事ができそうです。こんなキラキラした季節に思いつくす少し前のお話です。

私たち訪問介護員は利用者さんのお宅に訪問し支援を行います。ですから利用者さんのプライベートに一番近い介護支援者といえます。玄関から入りご利用者さんのお部屋に入るといらっしゃるのです。氷川きよしさんが、壁に。今という推し活。どうしても目に入るので利用者さんにお話をうかがうと、なかなかの推しっぷり。以前はコンサートに行っていた、CDをジャケット違いで買いそろえている、テレビ番組のチェックは欠かさないと。これがまたお一人の利用者さんの話ではありません。別の利用者さん宅を訪問すると『あ！ここにもきよし！』『ここにもいらっしやった』となかなかの遭遇率なのです。

訪問するたびに熱く推されるのでこちらもいろいろ詳しくなります。氷川きよしさんの

話をする時はみなさん素敵な笑顔でキラキラしていらっしゃるのです。そして推し活中の利用者さんの共通点が、若さと元気。実は皆さん八十代後半〜九十代なのですが実年齢より若く見え、気持ちも若いのです。

氷川きよしさん推しⅡ元氣な利用者さんというのは何の根拠もない、ただただ私の感覚・感想です。しかし推しがいる（ある）というのは、人を元気に明るくし、日々の生活に張りを出してくれるものです。推し！活に年齢は関係ない。

今年より活動休止中の氷川きよしさんがっかりされている方も多いのではないのでしょうか。それとも新たな推しを見つけているのでしょうか。

氷川きよしさんの早い復帰を願いつつ、私も今年の春は誰（何）か推し！活始めてみようかと思うのです。皆さんも推し！活、いかがでしょうか。



児童養護施設 望みの門かずさの里

どうする施設養育！

施設長 戸波 宏幸

NHK大河ドラマ「どうする家康」が現在放映されています。この「どうする……」の



困り感、前向き感の相まったフリーズが、不思議と心地良く響き、自身の今の仕事観に共鳴しています。コロナ禍対応の出口がようやく見え始めたこの時期、新たな思いと改めての決意とが、「さあ！どうする」と自身に問いかけていくように感じます。内面には現場スタッフ共々この三年、何かと行動出来ない・しない理由をコロナ禍に被せていたのでは？の反省が少なからずあります。この間の子どもたち含めた労苦と営みを、明日への糧として今一度整理すべきと考えます。

さてこうした中、改正児童福祉法の成立を

基に、子ども家庭庁の創設等、子どもたちへの制度施策が大きく変わろうとしています。あらゆる子どもたちの健全養育を目指した包括的な支援体制。施設で育ち巣立つ子どもたちへの厚い支援体制・取り組みなど、これまでに社会的養護の課題として主張してきた内容の一部に目が向けられたと言えます。一方で、携わる地方行政機関・私共の担うべき役割が多様化・細分化し、現場感覚から表現すると更なる複雑化とも言えます。改正される制度・施策の主旨と、当事者となる子ども一人ひとりの実情とをしっかりと見極め、「誰の・何のためにあるのか」を常に問いながら取り組みたいと思います。また、子ども家庭庁の創設と厚生労働省との兼ね合い、施設運営での管轄官庁は？施設で育つ子どもの管轄官庁は？等、まだ不透明な点も多く施設養育の管理者としては、煩雑対応を危惧し何かと構えた姿勢となっています。

他方、県内の児童養護施設では人材確保が進まず、運営体制において深刻な課題となっています。当施設においても法人共々、様々なクルートを行っています。採用に繋がるケースは少ない状況です。現在の職員構成（年齢等）から、三年後、五年後の運営シミュレーションをすると、その状況は大変厳しいものになります。故に、先を見据える姿

勢、危機感から悟る課題等を職員間にて共有し、語り合うことがより重要となっています。「やれることをする」の時期は過ぎ去り、「やらなくてはならないことを、まずする」の待った無しの状況であること。「どうする○を？」「どうする△△を？」迫られている中での判断、決断、行動力が何よりも求められています。

この状況下、十七年目の施設運営が始まっています。「どうする施設養育／里の子育て」……改めて自身に問うとともに、経験を積み上げ次世代を担うスタッフたちに語りかけます。「どうする主任さん！」

乳児院 望みの門方舟乳児園

新年度に向けて



施設長 白鳥 正道

沈丁花の香りが届く時期となりました。一足先に梅の花は行きかう人の目を楽させています。日本には四季があり私たちは生まれた時から五感を通して季節を感じます。もちろん日本以外に四季のある国はいくつもありますが、虫の出す音を声と認識するのは日本人だけだそうです。世界的にみれば虫の音も工事の音も何ら変わらない雑音として認識されるそうです。確かに移行行く虫の変化や声

の変化で地域を感じたり季節を感じたりしていることに気づきます。

三年にわたり私たちの生活に大きな影響を与えてきたコロナも五類感染症に引き下げられ、季節性インフルエンザと同じ扱いとなります。とはいえ職員が感染した場合の影響は大きく、動ける職員だけでその期間やりくりするのは至難の業です。かからないで済むのであれば防ぎたいものです。

方舟も九人の定員を一杯にできない状況が



続いており、ある意味では乳児院に隔離されるケースが減少していることを喜ばしく思います。乳児院への措置は減少し一時保護での入退所調整が増えたことで家庭支援専門相談員の業務が煩雑になっており、長く生活している児にも出入りがあることで安定さを欠く生活になっていないかが懸念されます。小規模グループケアでの少人数養育でより安定した生活環境を提供する責任を感じます。

更に今後の乳児院は乳幼児総合支援センターとして地域ともつながり他の社会資源とも幅広くつながることで母子が地域で安心して生活できるよう支援する。その為には施設としての体力がなければ施設の外へ出前サービスを展開していくことは難しいでしょう。役割があっても実際に展開することがなかなか厳しい現在一人でも多くの乳児を支える働き手が見つかることを切に願いつつ、安心安全な安定した生活環境構築のために歩みを続けなければならないと気持ちを新たにします。

望みの門里親支援センター

新年度にあたり〳〵五十路知命〳〵

センター長 井本 義樹

里親支援を専門にした業務に携わり一年半が過ぎ、二回目桜の季節を迎えます。乳幼児

であれば、歩き初めてから慣れ始め、ぼちぼち周りが気になりながら、あっちへ行ったりこっちへ行ったりを繰り返して、様々な楽しみを覚える時期です。当センターも同じように県内外の里親家庭をあちこちと周らせてもらい、皆様からいろんなお話、つながりを持たせてもらいながら、新しい出会い、発見を楽しみにさせてもらっています。私事で恐縮ですが、昨年、知命を迎えました。天命を知ることはできないまま、一年を過ごすことになりそうです。そんなこともあり五十年前の人口と、現在を比べて社会的養護環境の変化を考察してみました。

昭和四十七年総人口は約十億七千五百九十五万九千人、(昭和四十二年に人口一億人を超える)出生数は二百三万八千六百八十二人、この前後五年の出生数も二百万人前後、この十年間だけで当時の総人口の約十九%を占めていました。令和四年の総人口は約一億二千四百九十七万千人、出生数は七十九万九千七百二十八人、(平成二十八年に出生数百万人を割り込んでから上昇することなく減り続けており、平成二十二年には出生数と死亡数が逆転し、いわゆる少子高齢化社会が加速し続けている。)平成二十八年を起点とした前後五年の出生数を百万人前後とすると、この十年間は総人口の

約八%しか占めていない。つまり五十年間で出生数は半減しているのがわかります。その中で、虐待相談件数は、平成二十八年度初めて十万件を超え、その後、その数を割ることなく増え続けており、令和三年には初の二十万件を超え、令和四年の速報値では二十万七千六百六十件となっている。『出生数は減少しているのに虐待相談件数は増加。』数値だけ見るととても暗い気持ちになるのは否めないのですが、里親家庭・母子ホームを含めた入所児童数は、平成二十一年度末四万六千二百三十四人(児童養護三万五千九百九十四、乳児院二千九百六十八、里親三千八百三十六、児童心理千百十一、児童自立千五百四十五、母子五千八百九十七【児童のみ】、自立援助ホーム二百八十三)、令和元年度末四万三千六百五十人(児童養護二万四千五百三十九、乳児院二千七百六十、児童心理千三百七十、児童自立千二百一、母子五千六百二十六【児童のみ】、自立援助ホーム六百六十二)と減少傾向にあることがわかり、虐待相談件数の増加イコール社会的養護が必要な児童増加ではないことが証明されている。つまりこの結果は、社会全体がこどもに関心を持つ社会ができてきているといえるのではないのでしょうか？

本年四月から「こども家庭庁」が始動し、

「こども基本法」も施行され『子どもの権利』が法的な根拠を得ることとなります。「生きる権利」、「育つ権利」、「守られる権利」、「参加する権利」が適切に守られる時代がやってきました。社会的養護が必要なこどもやその家庭に対して、これからの皆さんの力を借りながら、適切な養育ができる環境、子どもの未来と一緒に考えることができる社会づくりに、これからも当センターが貢献するよう邁進していきます。本年度も引き続きご支援の程宜しくお願い致します。

児童心理治療施設 望みの門木下記念学園 チーム木下記念学園で子ども達を支える

心理相談員 東村 通紘

木下記念学園は、開設して八年目を迎える施設です。その間、子ども達の放つエネルギーに圧倒されて、職員は心のエネルギー切れからバーンアウトされてしまった方もいます。開設当初から残っている職員は僅か二名。その現状が当園の難しさを物語っているのではないだろうか。

そのような中で、昨年度の取り組みの一つとして、併設されている君津特別支援学校上総湊分校の先生方も交えた勉強会を行いました。発達や愛着など専門的な知見を伝える

だけでなく、私自身の経験を交えながら、「〇〇さんとの関わりの中で気持ちが悪くなった」「仕事帰りの車内で無力感から涙が止まらなくなった」など敢えて自分自身の感情を吐露するという【感情の吐き出し】を行いました。すると参加者から「今、私も苦しい」「木下記念学園での経験の長い」東村さんでも大変な思いをしたのは励みになる」など、【感情の共有】の場となりました。

当園には様々な事情を抱えた子ども達が暮らしています。そんな子ども達は、沢山の試し行動、激しい暴力行為、飛び出し、過度な甘えなど様々な形で「この人は自分にとって大丈夫な存在か」を確かめながら必死に生きているのだと思います。そんな状況に常に晒される私たち職員は、疲弊して、時に自分の



理想は打ち砕かれ、悲しみや怒りに浸ることもあります。それでも「この子の為に何ができるのだろう」と私たち職員も必死に生きています。支援で一番大切なことは、困難さを一人で抱え込むのではなく、チームで抱え込み、解決策を導き出す事だと感じています。苦しいことを「苦しい」と言う事は、決して恥ずかしいことではなく、支援に活かせるスパイスだと思います。そして周囲は、その苦しさを共有し、そっと支える事がチームで働くということではないでしょうか？

今年度は、日々の業務内でも【感情の吐き出し】をしながら心のエネルギーを充電し、その感情をチームで抱え込み、「さて今日はどうやって子ども達と関わろうか」とチーム木下記念学園で支援していきたいと考えています。

児童家庭支援センター 望みの門ピーターパンの家 つながる

心理相談員 斎藤 美紀



映画『THE FIRST SLAM DUNK』に魅了されて、映画館に何度も足を運んだ。この映画の凄いところは観客席から試合を見ているのではなく、コートにいる選手目線で試合を見ることが出来るところだ。フェイクに

引っかかり一瞬で抜かれたときのゾクッとす
る感覚、マークしている相手選手の身体の
庄、ジャンプシュートで手から離れたボール
がゴールに入るまでスローモーションに感じ
るときの静けさ。映画を見てみると、まるで
自分がコートの上にいるような感覚になる。
バスケットは、ボールをドリブルやパスで運び、
ゴールまで繋いでいくスポーツだ。私はミニ
バスをしていたとき、仲間からパスを受け、
ゴールから少し遠い場所からジャンプシュー
トをするのが好きだった。自分が欲しいタイ
ミングで仲間からパスが来て、ボールを掴み
ながら膝を曲げる。その流れの中で自然に手
が伸びてシュートを打つ。リズムがそうとう、
自分の身体がゴールと繋がるような感覚にな
る。「あ、これ入る」とわかる。その瞬間スロー
モーションに感じる。仲間、自分、ゴールが
繋がる瞬間だ。ボールを通して仲間と繋がる。
自分の身体と繋がることで自分と繋がる。
ピーターパンの家では、心のケアが必要な
子どもにプレイセラピーを行っている。プレ
イセラピーとは、安心安全な環境のもと、遊
びを通して心のケアをする心理療法である。
プレイセラピーをしていると、子どもと繋
がっているように感じるときがある。そのと
き何とも言えない心地よい感覚になる。この
相互作用がプレイセラピーの魅力なのではな



いかと思う。誰かに相談したときに気持ちを
汲んでもらえた心地よさに似ている。バス
ケットボールアナリストの佐々木クリス氏が
『THE FIRST SLAM DUNK』特集のラジ
オで「バスケットは救済」だと言っていたが、他
者と繋がること、自分自身と繋がることで癒
されていくということなのではないかと思っ
た。パスをもらうことが仲間からの信頼だと
するならば、自分自身と繋がるということ
は自分を信頼できるということなのかもしれ
ない。
この春、十年目を迎えるピーターパンの家
も利用者、関係機関、そしてスタッフ間での
繋がりをより強化し、新たな一歩を踏み出
ていきたい。

編集後記

「経営の神様」稲盛和夫は新入社員に対し
てこう語りかけている。「他人から『しても
らう』立場でいる人間は、足りないことばか
りが目につき不平不満ばかりを口にする。し
かし社会人になったら『してあげる』側に立っ
て、周囲に貢献していかなくてはならない。
そのためには人生観、世界観を一八〇度ひ
っくり返さなければならない」

この四月、新しい場所に漕ぎ出した新入職
員が与えられた。望みの門の精神は巻頭言で
語られた通り「他者にしてあげる」ではなく
「他者に仕える」である。これは最後の晚餐
に集まった弟子の足をイエスさまが洗った出
来事に由来する。主であるイエスさまが私た
ちの足を洗う者となってくださるのだから、
あなたがたも互いに足を洗い合う者になりな
さい。「足を洗う」というのは一つは人に仕
える者になるということ。そしてもう一つは
互いに清め合うこと、つまり赦し合うことだ
ある。イエスさまは身をかがめて、僕の姿と
なって、ついには十字架にまでおかかりに
なって、私たちを愛し罪を赦してください。
その感謝をもって主から受けた愛と恵みを互
いに分かち合う者になりたい。